

動物がいてくれて～豚の行進

サキノは少し経つと、動物の世話にもすっかり慣れてきた。そして、たちまち豚の世話だけは一人で任されるようになった。家にいる動物のなかで、一番手がかかるのが豚だった。餌ひとつとっても、他の動物は草だけ刈ってきて置けば、誰でも都合のいいタイミングで餌やりができる。豚はそうはいかなかった。

登校前に1度目、学校の昼休みの間に帰宅して2度目、夕方3度目と、豚には一日3回時間を決めて餌を与えなくてはならなかった。昼休みは、食事を終わると自由な時間だから、さっと帰宅して餌を食べさせることは何の苦もないことだった。

豚は腹がすくと、時々暴れて小屋の柵を壊して外に出て行ってしまうことがあった。栗田家の豚小屋の柵はいつもサキノの父親、栗田藤利（トオリ）が作っていた。でもあまり器用な人ではなかったらしい。

「おら家のおどっつあは、とにかくぼっきの利かねえ（不器用な）人だったから、村の中でも“トオリ爺さまの小屋はぶっくれだから、また豚が散歩してるわ”なんて、よく言われてたもんや。まあほんにとろへつ（しょっちゅう）壊れてばかりいたからな」。

豚が柵を壊すのは昼前の頃が多かった。腹が減ってくると暴れ出して、柵を壊していたようだ。豚が外に出ると、村の誰かが学校に知らせに来ていたのだろう。先生が「また豚出たようだぞ。」と、教えてくれるものだったという。

昼休みを待って、サキノは急いで家の方へ戻る。豚が家の近くの道路の辺りを、5匹でウロウロ歩いているのは見当がついていた。誰かが豚を連れ戻そうとしても、ギャンギャン騒いで暴れるので、誰も手を出せずに、ただ見ているしかなかった。

名前までは付けてはいなかったが、サキノはそれぞれの豚の違いがちゃんと分かったという。サキノは豚のそばに行き、こう話して聞かせたそうだ。

「ほら、腹減っただべ。早くええべ（行こう）な。まんまくれっからな」。

そうすると、5匹の豚は静かにサキノの後をゾロゾロとついてくるのだった。

「ほんに不思議なもんで、オレの言うことしかきかなかっただぞ。人は豚なんて…って馬鹿にするが、そんな時、ああやっぱ豚もちゃんと餌くれる人のことは分かんたなあ。ちゃんと手かければかけただけ、気持ちは通じんだなあって子供ながらに思ったっけよ」。

こうして大切に育てた豚も、家畜である以上いつかは売られていってしまう。

「川口のノンキヤ（肉屋）の爺さまが来て、そろそろ育ってきたなあ、みたいな話が聞こえっと、何だかざわざわしてきて、オレはその時だけは裏の方に引っ込むもんだっけ」。

こうしてサキノは、動物と通じ合う心も知り、同時にどうにも出来ない別れも知っていた。動物との暮らしの中にある深い学びを、サキノは一つずつ丁寧に拾い上げていたようだ。